

談 話 室

「遠い風，向かい風」

～米国留学で痛感した英語習得への課題～

村 田 直 樹

San Francisco, CA.

'94/10/20.

I. はじめに

香川大学教育学部学術助成金を得て、この度、短期米国留学を果たした。その主たる目的は国際化した柔道の将来を鑑みての米・欧柔道の調査と事情視察にあった。しかし、これから述べようとする内容は、私の留学目的の活動内容についてではない。留学目的達成のための側面的な部分、即ち米国留学中、私の感じた語学への問題意識について書くつもりである。

私はこれまでに、柔道の指導と普及の目的で長期、短期おりまぜて幾度も海外へ出掛ける機会を得た。パスポートも6冊を数えている。日本を飛び発てば、言葉が変わる。英語だ。その英語を私は中学、高校、大学と学生時代を通算して8年間習った。しかしどうだ。中間テストや期末テスト、その間を縫って折々行なわれた進研テスト等の点数も良く、英語では優秀な成績を取った生徒が、長じて海外へ出掛けて仕事をするようになってみると、その英語は殆ど役に立たず、そ

の後、独学で身に付けた英語のほうが遙かに役に立っているという事実は。

そして今回、米国に滞在し、改めて英語についてつくづく感じ入ってしまった。それは日本人にとっての英語習得の道の遠さを、である。英語習得の風は遙か遠くを吹いていて、しかもそれは習得に逆らう向かい風である。

以下、或る英語使用体験者のレポートをお届けする。江湖のご批判を仰ぎたい。

II. 苛立ち

当地に来て強く感じた。言葉の問題だ。現地の人々の言動を耳にして、どうしても違和感がある。その違いを克服しない限り現地の言葉、即ち英語を真に習得することは出来ないのではないかと、つくづく思うようになっている。

ここに違和感とは何か。発想である。例えば今朝のこと。折しも私は歩道に面した或るコーヒーショップの前を歩いてた。

“Here we go! Good morning!”

私はサッと声の方を見た。白い前掛けをした若者が、店の準備にせわしく体を動かしながら、叫んだのだ。私はそのコーヒーショップの前を歩いていたから、私に向かって叫んだのかと思ったが、そうではなかった。店の準備に余念の無い彼は、横を向いて相変わらずせわしうなままだった。この言葉を耳にして、私は、一瞬、何のことも分からなかった。しかし、勘で分かろうとした。何となく分かる気がした。けれども直ぐにこの、何となく、という感じがいつものように私の頭の中を、ベールを被せたような、

ものごとをハッキリさせない思いで包んだ。

これは一例である。この例以外にも直面した同様の体験が数え切れないくらい有る。米国に住んで、現地の人々と交流する中で、このベールを被せたような、ものごとがハッキリしない思いが一再ならず、再三再四、私の日常に生じている。それは言わば、不明朗さ、不明確さである。この不明朗さ、不明確さと共に日常生活を送ることに不満とストレスが募り、苛立ちとなっている。

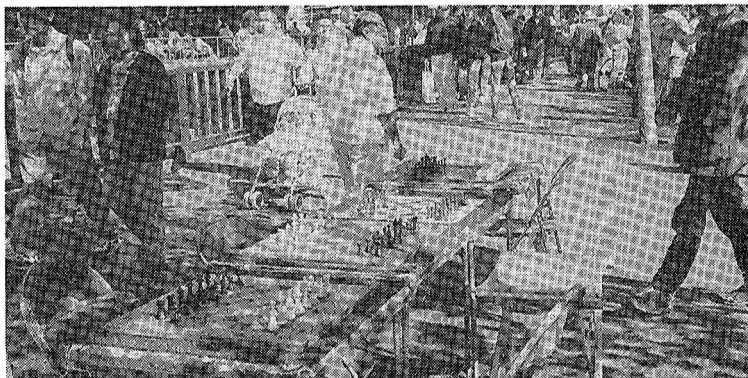


写真1 広い歩道には賭けチェスの台が待っている。

Ⅲ. 疑問点

ここに私の主たる疑問点とは何か。それは、“Here we go! Good morning!”という斯様な言葉が如何にして、又、どうして発せられるのかと言う点である。如何にして、とは換言して、どのような心情で、ということである。どうして、とは何故そういう表現をするのか、ということである。

さし詰め私が仮にその店の若者だったとしよう。朝の準備が出来つつあって、

私は何を口にするだろうか。

「さア、用意が出来た（お客さんは来ないかなア）」

くらいのことは言うかも知れない（或いは別に何も言わないかも知れない）。これは、その時、私の胸に生じるであろう心情を假想した話である。

心情が言葉となって現れる。これが言語を有するヒトの自然だ。“Here we go! Good morning!”と発した彼は、その時、そう発するだけの心情を持った

のだ、と言える。「さア、用意が出来た（お客さんは来ないかなア）」と発するであろう私も、同じくその際、そう発するだけの心情を持つからそう発するのだ、と言える。しかし、私がことを英語で行おうとするとき、即ち現地の人々の言語で行おうとするとき、例えばこの、

“Here we go! Good morning!”

が私の口から出て来るか。出て来まい。私の心情にはHere we go!もGood morning!も無いのである。しかし、こう言わなければ現地人とはうまくコミュニケーション出来ないのだから、少なくともそういう表現を発していったほうが、英語を話す現地の人々と心が触れ合い、通じ合い、そのコミュニケーションはより自然で、より普通で、より円滑に行くのだろう。そうだとするならば、私が、英語を話す現地人の社会に溶け込んで、より自然で、

より普通で、より円滑なコミュニケーションをしたいと思う時、どうしたら良いのか。ここをこそ喉から手が出るほど知りたいのだ。しかし、その詳細な解明はその道の専門家に任せるとして、ここでは自分の体験に基づいて考察をするのみである。

私が、英語を話す現地人と、より自然で、より普通で、より円滑なコミュニケーションをしたいと思う時、どうしたら良いのか。その道は如何にありやなしや。

ここに思いを馳せるとき、単に英語の言い回しを暗記しろ、と言われる前に、私としては、ヒトに言語表現を行わせる背景、即ち、心の根のほうを考える必要性を感じてしまうのだ。ここではそこを覗いてみたい。



写真2 賭けチェスのプロ達。何を話しているのかサッパリ分からなかった。

IV. 心根（こころね）整備の必要性

さて、私は前段で、「英語の言い回しを暗記しろ、と言われる前に、ヒトに言語表現を行わせる背景、即ち、心の根のほうを考える必要性を感じてしまう」と

述べたが、何故か。

その理由は、

第一。言語表現を行わせる背景＝心根（こころね）のほうを整備しておかなければ、かの“Here we go! Good morning!”

は一生、私の口をついて出て来ないのではないか、と思われるからである。そうであれば結局、私は英語らしき英語に接近し得ないまま英語とのつき合いを終えることになり、これで英語学習の道は良かったのだろうか、甚だ疑問に思うからである。

第二。私の内側、即ち「言語表現を行わせる背景」の処に日本語的心根（こころね）が在り、それが私の英語表現を全てにわたって、ことごとく邪魔するのである。即ち、日本語の発想で英語の表現をさせる。その結果、妙な英語を、否、それを英語と呼ぶには失礼だろう、（だから）妙なシロモノを発する現象となる。話せる英語の習得を前提にしている場合、これを問題とせずは何を問題とし得ようか。

以上を換言すれば、話せる英語の習得を志すにあたって、話せる英語のための心根（こころね）のほうの整備を怠れば、現地の英語社会に融和する英語らしき英語は一生しゃべれないまま、英語とのつきあいが終わるであろうし、日本の英語教育であれだけ苦しめられてきた語学がそんな結果でしかないとするならば、一体、あの教育は何だったのか、と改めて何とも寂しく、何ともやるせない思いに駆られ、果たしてこんな在り方で今後とも良いのだろうか、海外で働いたり、英語を話す仕事についたりしようとするこれからの新しい才能に対し、これがベストの在り方だろうか、と深く悩み、深く悩むが故に日本の英語教育に対する動かし難い疑惑の念を抱くに至り、それが自分としてはたまたま嫌悪であり、問題ではないのかと主張したいのである。

私は感じている。日本語を話している時の自分と英語を話している時の自分とが、別人のようである、と。私は私として同一人物でありながら、その内面では、日本語を話している時の自分と英語を話している時の自分との間に違和感を持つ。その違和感の上に二本足を広げて立ち、言動を続け、行動している自分が居る。これで大変に疲れている。日本語的心根（こころね）の上で異質な点の多い二つのことを行なっているからであろう。

V. 心根（こころね）とは何か

留学先のウイスコンシン大学や訪問先のサンノゼ大学には日本人留学生が少なくない。教鞭を執っている日本人もいる。留学生活に於ては英語を用いなくてはならない私だが、こういった日本の人々と交流する時は勿論、日本語を話す（但し、中に米国人が入ると私は出来るだけ英語を話す。その際は日本人に向かって話す時も英語を使用する）。

私は、日本語を話している時の自分の内面と英語を話している時の自分の内面との違いについて、多少ながら実感出来るようになってきている。ここでは私が言語表現をする際の裡なる背景について、覚束ないながらも内観を試み、記述してきた心根（こころね）とは何かの分析を試み、皆様と共に考えてみたい。

①心理的側面；

・日本語を話しているとき⇒しっとりと落ち着いて、安定感があり、快感に満ちている。我が心の裡なる人格の根の存在を感じる。

・英語を話しているとき⇒地に足が着かず浮いた気分で、何処か漠として、不

安定感が漂っている。心の裡に人格の根を感じず、それまでの自分の人格が消失してしまったかの気分である。

②生理的側面；

・日本語を話しているとき⇒疲労感がなかなか来ず、疲労感の来る兆しがみえ始めると、愉しくなる方向を模索しようとする。

・英語を話しているとき⇒疲労感がすぐに来、疲労感が来ると、もう英語を話すことを止めたくなり、拒絶感が生じてくる。

③言語的側面；

・日本語を話しているとき⇒敬語を駆使しようとし、その使用がうまくいくことを心掛け、うまくいかせることに腐心し、その道で作法無作法、快不快等を感じてとっている。

・英語を話しているとき⇒表現に違いを設けるわけ無く、又、その術もなく、持ち合せの表現、単語を発するのみであり、言動に陰影を感じない。ために快不快感も薄い。

④対人的側面 A；

・日本語を話しているとき⇒年齢に拠る明確な上下の区別とその水準を設け、対象に対しては、この区別とその水準に拠り、言動、行動、起居振る舞い、その他一切等、変えて対応しようとする。

・英語を話しているとき⇒年齢の如何に拘らず、言動、行動、起居振る舞い、その他一切等、変えず、対象に対しては対等にして平等に対応しようとする。

⑤対人的側面 B；

・日本語を話しているとき⇒女性を立てない。単に優しくしているだけである。恐くない。

・英語を話しているとき⇒女性を立てる。After you の精神に徹して対応する。恐い。

私が日本語を話している時の自分の内面と英語を話している時の自分の内面との違いについて、多少ながら実感出来るようになってきているというその内容は、今の処、以上である。



写真3 パーティではくだけた会話が必要となる。でも仲々々…。

VI. 心根（こころね）の整理

ここに日本語を話しているときの心の

裡なる背景を「日本語表現の際の心根（こころね）」と称させて貰い、上述①～⑤の「日本語を話しているとき」をもう一度整理してみたい。日本語表現の際の心根（こころね）のまとめである。

①心理的側面；

・しっとりと落ち着いて、安定感が有り、快感に満ちている。我が心の裡なる人格の根の存在を感じる。

②生理的側面；

・疲労感はなかなか来ず、疲労感の来る兆しがみえ始めると、愉しくなる方向を模索しようとする。

③言語的側面；

・敬語を駆使しようとし、その使用がうまくいくことを心掛け、うまくいかにすることに腐心し、その道で作法無作法、快不快等を感じてとっている。

④対人的側面A；

・年齢に拠る明確な上下の区別とその水準を設け、対象に対しては、この区別とその水準に拠り、言動、行動、起居振る舞い、その他一切等、変えて対応しようとする。

⑤対人的側面B；

・女性を立てない。単に優しくしているだけである。恐くない。

以上の①～⑤が如何なる組合わせかは知らず、時に混合、時に化合して、私の日本語表現の背景を司っている様である。ここではこれを私が日本語を話しているときの心の裡なる背景、私の日本語表現の際の心根（こころね）と措定しておく。そしてこの心根（こころね）が話す英語の習得を失敗させて来ているのだ。



写真4 子供との会話が一番疲れる。しかし、楽しい。

Ⅶ. 自由と民主主義を獲得した民の言語

米国は移民の国家、社会である。私は今回、米国に来るまで、米国民は英語（或いは米語と言うべきか）をしゃべっていると信じて疑わなかった。ところがこの思いは誤りであった。例えば、New

York。米国を代表する世界の経済の中心地。私は信じて疑わなかった。New Yorkだ、英語をしゃべらなくては、と。市民は皆英語をしゃべって暮らしているものと信じて疑わなかったからだ。ところが行ってみて驚いた。何語だか分から

ない言葉が其処ここで幾つも幾つも飛び交っているではないか。顔つきを見ればそれぞれがそれぞれに違い、多様とはまさにこのことかと思わざるを得なかった。商売をするのでも、白い顔と黒い顔、黄色い顔と茶色い顔等、相手は何処の誰なのか、その背景は殆ど未知である。それでも社会は運営されねばならない。社会は生きているし、動いていく。移民国家米国社会。この様な国にして初めて、その社会を営み、その社会の中を生きていく上で、自身のIdentityを以て（＝自立し）、自己主張と交渉と妥協の民主主義が必然の方法となるのか、とつくづく思わせられた。彼ら市民はその前提として自由である。その意味で対等である。彼らは自由と民主主義を獲得した民である。自由を宣言し、民主主義を常に問うていく国家を支える民である。

斯様な国家、社会に生きる米国市民の心の裡、心根（こころね）には自由と民主主義が我々日本人の想像を超えてしっかりと根づいているに違いない。米国留学中に経験した彼らとの人間（じんかん）交流や見聞の体験を通じて、私はその感を強く抱くに至っている。自立して生きていく自由な人々の行動とは、例えば男女の在り方一つをとってみても、年代を超えて、時空に関係なく、手に手を取り合い、抱き合い、頬ずりし、又、アイスクリームを食べながら仲睦まじく歩き、さらには個性を強調するかの様にそれぞれカラフルな衣装を身にまとい、周囲を見れば、周囲は周囲で又同様の光景にあふれている。真に個性の尊重されているさまが伝わってくる。街角に目をやれば、楽器を奏でる者、演説をする者、

コーヒーを飲んで陽射しを浴びている女性等々と又、色々である。ダイエットペプシを飲みながら道路に寝そべて話に夢中人もいる。解放された、自由と民主主義を獲得した市民社会に生きる人々の生の顔が其処に在る。

斯様な国家、社会に生きる米国市民の心の裡、心根（こころね）には自由と民主主義がどっかりと根を下ろし、私の裡なる心根（こころね）、即ち、VIで述べた①～⑤の様な内容は皆無に等しいに違いない。そのような彼らが操る言語、英語。その言語表現を司る背景、心根（こころね）は自由と民主主義であり、私の内面の様に、例えば、③言語的側面；敬語を駆使しようとし、その使用がうまくいくことを心掛け、うまくいかせることに腐心し、その道で作法無作法、快不快等を感じてとっている、や、④对人的側面A；年齢に拠る明確な上下の区別とその水準を設け、対象に対しては、この区別とその水準に拠り、言動、行動、起居振る舞い、その他一切等、変えて対応しようとする、などは有るまい。そうであるが故に、発想も表現も日本人の私とは大いに違うのだ、と考えることは許されよう。

“Here we go! Good morning!”の叫び声も、そう呼びたくなったら自由に叫んだのだろう。別に対象など居ないのだ。彼は店の準備も出来てきて気分も良くなってきて、自由にその気分を表現したのだろう。自由に振舞ったのだろう。其処をたまたま通りかかった私が驚き、そんな表現がよく出るなアと感心もし、疑問にも思ったのは、既に述べてきたような私の日本語表現の背景なる心根（こ

ころね)が働き、その心根(ころね)で以て聴き、判断していたからだという証拠なのだろう。故に違和感にもなったのだろう。

米国に来たなら日本語表現の際に使う心根(ころね)はひとまず脇に置き、自身の頭の中を自由に解放し、言いたいことをそのまま言えるような心根(ころね)にセットすることが必要事項の様である。

ヒトが自身の内面をそんな簡単に変えられますか、と言う反論が聞こえてくる。それなら少なくとも平素から訓練しておかなければならないということになろう。

米国に来なくとも日本に居て、その訓練は可能だろうか。可能と言うべきである。近現代の日本は声高らかにうたっているのではないか。民主主義国家、個性の

尊重、主体性の確立と。

しかし、実際の姿、日本人社会の現実はどうだろうか。そこは相変わらず受験競争に収斂される英語教育と、先輩後輩という表現に象徴される集団帰属のタテ社会の場である。これを平素として呼吸し、生きている日本人にとり、自身のIdentityを以て(=自立し)、自己主張と交渉と妥協の民主主義と自由の訓練がどれほど可能だろうか。

遠い風、向かい風。

自由と民主主義を獲得した民の操る言語、英語。日本人の心根(ころね)を持つ私にとって、その英語習得の風は今尚、遠くを吹き、しかも頬に感じるのは、その習得をせせら笑うが如き向かい風なのである……。



写真5 こういう時が一番辛い。うまいかうまくないか
位しか言えないからだ。あとはサッパリ不明……。

【Memo】

⇒今回の米国留学で再認識し、改めて得た教訓

①ヒトの内面に形成された根が違う同士のクロスカルチュラルコミュニケーションは、相互が親しくなればなるほど、

その根に近づき、そして、その違いに直面してくる。その違いに直面して初めて、双方にとっての本当の異文化間交流の道が模索される。その水準までつきあわなければ、この種の問題は生じないし、縁がない。

②ヒトの内面の根を形成する価値観、
そしてその表出方法に相違在る国際社会
に於て、より自然で、より普通で、より
円滑な人間（じんかん）交流を可能とし
ていく道は、机の上で考え、頭でひねり
出して得られるものではない。経験の質
・量が必要条件である。